

村出身者はすべて村民である

—コートジボワール・アジュクル社会の都市と村—

茨木 透*

1 はじめに

本論では、コートジボワールのアジュクル人にとっての村と都市の関係について検討したい。

アジュクルの人びとはコートジボワールのダブ県出身で、かつてはダブ県の30あまりの村にわかれて住んでいた。現在その人口は推定約10万人であるが、約半数がアビジャンなどの都市に出て生活をしているものと考えられる。人びとの都市への流出の歴史は古く、1960年の独立以前にさかのぼる。したがって現在では都市で生まれ育った第二世代、第三世代もみられる。しかし、これら二世や三世をふくめ都市のアジュクルの人は出身村の帰属を失なわないと考えられるのである。

都市に住む人びとが出身村への帰属が失なっていないことは、次の三つの面にみられる。第一に、アジュクル人にとって重要な四つの人生儀礼である出生時の洗礼、成人儀礼、8年に1度の年齢階梯上昇儀礼、そして葬儀はすべて出身村でおこなわれる。死後に埋葬されるのももちろん村の墓地である。男性の場合はこれら四つの儀礼に加えてさらに「アンバンジ」と呼ばれる富者儀礼も村にたくさん招待客を呼び寄せておこなう。これにより村人としてのアイデンティティが形成・維持されるであろう。第二に、都市に住むアジュクルの人びとは日常的に頻繁に村との間を行き来し、親族や村人との交流を維持している。第三に、人びとは出身村へ投資をする。村を出て得られた多少なりとも財産は、村に持つ土地に油ヤシやゴムを植えプランテーション化するために投資されるとともに、現在住んでいる地ではなく出身村に家を建てることにまず使われているのである。一方、村に住む人びともその多くが都市生活の経験を持ち、日常的にも頻繁に都市とを往復するなど、純然たる村人とは言い難い面がある。

これまで都市生活者側からみた都市と村の関係についてはいくつかの研究がある〔Chalreard 1989; Dozon 1983〕。本論ではこれらの研究を参考につつ、都市生活者の側の出身村への意識とともに、村に住む側が都市や都市で暮らすことをどのようなものと考えているかを検討したい。

2 モボエム村と村民

コートジボワールの最大の都市は首都であるヤムスクロではなく、ヤムスクロに遷都される1983年まで首都であったアビジャンである。アビジャンの人口は約350万人で、コートジボワールの人口1600万人の20パーセントほどがここに暮らしている。この経済の中心地であるアビジャンから西へ約50キロメートルのところ、かつてのアビジャン県ダブ郡、現在はダブ県の中心地であるダブの町がある。この町は19世紀中頃にフランスが建設したエブリエ渦を一望できる城塞を中心に発

*地域社会講座（社会人類学）

達した植民地都市である。20世紀初めにはコートジボアール内陸部に到る道路がダブを起点として開かれ、陸上交通と水上交通の接点となり交通の要所として栄えた。現在の人口は6万人であるが、その多数派を占めるのは地元のアジュクル人よりもむしろコートジボワールの他地域や周辺諸国からの移入民⁽¹⁾である。ダブ県は歴史的にアジュクルの住む地域であるが、アジュクルの人びとはダブの町よりむしろそれぞれの村に暮らしている。アジュクルにとってダブの町はアジュクル語で「ガンガ・ブゲン」つまり「白人の町」であり、アジュクルの町とは考えられていない。

このダブの町からさらに西へ約10キロほど行くと、わたしが調査を続けているモポエム村がある。村はエプリエ瀉に面し、かつては地域の水上交通の中心として栄えた。今日村のアジュクル人の現住人口は約300人ならず、戸数は20戸あまりである。ここで現住人口としたのは、人びとの流動性が非常に高いためはっきりとした数の確定が困難なためである。そのほかここにも移入民が、おもに「ジュラ・ブゲン」と呼ばれる村の南はずれの一角に住んでいる。移入民の流動性はアジュクル以上に高くその数は季節的にも変動するが、定住しているのは100人たらずと考えられる。

村のアジュクル人の現住人口は300人足らずであるが、これに加えて村出身者約250人が村を離れて暮らしている。この非在住者の数は村人全員が信者であるメソジスト派の教会のリストから割り出したもので、村の50歳代の男性が長年このリストを管理している。リストには村在住者と非在住者の区別はなく、村で生まれた者は婚出者をのぞき全員の名があげられている。村の住民のリストとしては、政府のおこなう人口調査を除くとこれがおそらく唯一のものであろう。在住者と非在住者との区別がおこなわれていないという点から、人びとにとってその区別は重要なものではないとも考えられる。これらの村を離れて暮らす人びとのほとんどはアビジャンに住んでいるが、コートジボワールの他の町で働く者や、外国で生活している者もいる⁽²⁾。

村在住者と村外者に区別がないことは、村の政治や村の共同作業の面でも明らかである。村では週に1度以上の頻度で村会が開催され、村のすべての問題がその場で処理される。この村会に参加することは村外居住者であっても何ら問題なく、村に滞在している時などむしろ当然のものとして会合に出席している。ところが多数の移入民にはいくら長期間この村に住んでいても村会への参加権は与えられない。同じアジュクルの他の村出身者で村に長年住んでいる場合にも一般には村会への参加資格はないとされる。同じことは、村の共同作業や、村の会計をみてもわかる。共同作業への欠席に対する罰金の対象は、村外居住者にまでおよぶが、移入民や他村出身者には作業参加の義務はない。村の分担金の請求も村外在住者には同様におこなわれるが、移入民および他村出身者には課されることはない。このように、モポエム村の人びとにとっては村に在住しているかないかを問わず、村の出身者でありさえすれば村民であるということは明らかであろう。このような村民意識は重要な人生儀礼をとおして形成される。次節では村外在住者と儀礼の関係に焦点をおきながら、村でおこなわれる儀礼について述べたい。

3 儀礼と人びと

人びとは都市に出ても村との関係を消失するわけではない。このことの背景には、モポエム村の人びとのみならずアジュクルの人びとすべてが村在住か都市在住かを問わず、重要な人生儀礼を出身村でおこなうということが大きな要因としてある。アジュクルの人びとのおこなう人生儀礼は、洗礼儀礼、成人儀礼、年齢階梯上昇儀礼、富者儀礼（男性のみ）、葬儀の五つの儀礼である⁽³⁾。順に述べていきたい。

洗礼式は、村の出身者が村以外で子どもを産んだ場合でも、その子の洗礼は生後2ヶ月から3ヶ月後にかかわらず村の教会でおこなわれる。ちなみに、モポエム村の人びとはは全員がメソディスト派のプロテスタントの信徒であるが、他の村にはカトリックの信徒および土着化したキリスト教の一派であるハリス教の信徒もいる。モポエム村の唯一の教会であるメソディスト派教会には、2001年の冬まで常駐の牧師はおかれておらず、村人の中で説教師の資格を持った者が日曜の礼拝を執りおこなっていた。ただ洗礼の日は特別で、牧師が巡回でやってきて儀式を執りおこなっていた。

もちろんメソディスト派の教会はアビジャンにもいくつかあり、アビジャン在住の村出身者のなかで熱心な信者は日曜日にはそこに通っている。その中には教会の役員まで勤めている者もいる。しかし、洗礼はかならず村の教会でおこなわれる。

成人儀礼は、男性のそれが「ロウ」、女性のそれが「デジャップ」と呼ばれる、どちらも村で執りおこなわれる。男性の場合は年齢組⁽⁴⁾ごとに集団で儀礼があるが、女性はひとりずつ別に儀礼をおこない集団的な儀礼は持たない。

男性のロウ儀礼の場合、調査のできた50年あまりの間におこなわれた儀礼への欠席者は、各年齢組ごとに1人から3人までで、村在住の若者はもちろん都市在住の若者もほぼ全員がこの儀礼に参加していると言ってよい。欠席の主な理由は、外国へ滞在中、病気のため、父との不仲などである。新成人本人が欠席する場合も、その父はかならず代理をより年少の親族の一員から選んで立て、代理がすべての儀礼をおこなう。これにより形式上本人は儀式を完全におこなったものとみなされ、ロウ儀礼とともに形成される年齢組の一員と認められる。年齢組は村ごとの集団であり、人びとはそれぞれの年齢組を通して村のあらゆる社会生活に一生を通してかかわっていく。

年齢階梯上昇儀礼は、8年に一度これも村で執りおこなわれ、それぞれの年齢組がこの儀礼を境に年齢階梯を一段上昇する。アジュクル語の名称では、最上位の長老階梯の名称から「エベブ」儀礼と呼ばれように、長老就任儀礼でもある。同時にすべての年齢組がこの儀礼に参加するということは、つまり成人式を終えた人びとと全員が参加することであり、規模としては村最大の儀礼である。女性の場合はロウ儀礼をおこなわないので男性の年齢組の一員とはみなされず、はっきりとした女性の年齢組も存在しない。しかしながらそれぞれの女性は同年齢の男性の年齢組と同じ年齢組名を認識していて、年齢組上昇儀礼やロウ儀礼には同じ年齢組の女性がそれぞれ別に集まってダンスをするなど、非公式の年齢組として機能している。

成人儀礼をおこなったあと長老の階梯に昇るまでの間にすべての男性が一度しなければならないのが、「アンバンジ」と呼ばれる富者儀礼である [茨木 1995]。これは個人儀礼であり、多大な出費を要する。儀礼をいつどのようにおこなうかは個人の財力次第である。そのため儀礼の規模は大小さまざまであるが、一般に都市在住者の富者儀礼は規模が大きく、町での知人を村へ招く機会ともなっている。いうまでもなくこの儀礼も村で執りおこなわれる。

最後に、葬儀についてである。村外在住者が都市で息をひきとった場合でもかならずその葬儀は村でおこなわれ、埋葬も村の墓地に埋められる。同様のことはコートジボワールの他の多くの民族にもみられ [Touré 1984]、アティエ人の例は原口が紹介している [原口 1994]。原口はまた、一般に葬儀の費用が相当の額にのぼることも指摘している。アビジャンで息を引き取った人の葬儀を村でおこなう場合、葬儀の準備のための期間中は亡骸を遺体安置所に保管してもらい腐敗防止のためのホルマリン処理を施すこともある。亡骸を霊柩車で村に運んでくるのにも多くの費用がかかる [原口 1994: 216-217]。

村出身者で村で葬儀がおこなわれない人には正式に結婚し村を出た女性があげられる⁽⁵⁾。ここで

正式の結婚というのは婚資が支払われたか場合の結婚である。現在では婚資が支払われないまま婚関係を長年続けている例も多く、この場合は亡くなった女性の葬儀は夫側ではなく実家の方でおこなわれる。

以上、人生における重要な五つの儀礼がすべて村でおこなわれることを簡単に述べてきた。村の人はどこで生まれどこで育ちどこで死のうとも、儀礼上は村で生まれ、村で大人になり、そして村で死ぬのである。したがって、たとえ実際には村外で生まれ育っても、自己アイデンティティとして村人意識を持つことは難しくないであろうと思われる。

4 町と村の移動

アビジャンに住む人びとは、たいていは勤務の関係で主に週末に村へやってくる。村へ来る目的は、周辺の村をあわせるとほとんど毎週のようにおこなわれる葬儀に出席するが多い。しかしとくにこれといった用のない場合にもしばしば週末を村ですごす人もいる。大きな葬儀があるのは土曜日と決まっている。村での葬儀の場合は特に非常にたくさんの人びとが金曜日の通夜から村に戻り、村の人口は一時的にふくれあがる。

都市の人びとが村に戻ってくる一方で、村に在住している人の中にも村と外部とを頻繁に行き来している人がいる。たとえば、週の半分をアビジャンで暮らし残りの半分を村で暮らす人や、週末はほぼ必ず村に戻って一晩ないし二晩を村で過ごす人が数名いる。1週間単位でアビジャンと村を行き来している人も数多い。これらの人びとの場合、村在住とすべきなのかそうでないのか、判断はむづかしい。その例を女性と男性とそれぞれ一例ずつあげておこう。

まずモポエム村の隣村のボドゥ村の女性Aさん。年齢は60歳ぐらい。夫もボドゥ村に住んでいるが、Aさんは実家であるモポエム村の村長の家にも頻繁にやってくる。夫がアビジャンに小さな家を所有していて、それをAさんの弟Bに貸している。このアビジャンの家と隣村の間をAさんやその娘は頻繁に行き来しつづけている。Aさんはアビジャンでは「商人」としての身分証明証も作り、娘とともにアチェケ[®]の小売りをおこなっている。

Aさんの弟の借家人Bさん。年齢は50歳代前半である。1990年代はじめに仕事を失い、以後失業中。2人の妻をもち、同じモポエム村出身のひとりがモポエム村に、別の村出身のもうひとりがアビジャンの借家に住んでいる。失業後は毎週のように村とアビジャンを往復し、村にいるときにはときどき農作業をするほか、毎日のように瀉湖に漁にでている。現在は村在住だと人びとには考えられている。

このように、成人の場合は男女ともに仕事のためやつきあいのため、あるいはこれといった目的もなく、村とアビジャンを行き来している。だがそれは大人だけではない。子どもは村と町とを、大人とはちがった形で行き来している。

5 子どもと学生の移動

モポエム村には小学校がある。この小学校は第二次大戦後すぐに、ダブの町以外では地域で初の学校として開設されている。近くに学校ができたことが理由だろうと思われるが、村の50歳代以下の男性はほぼ全員が小学校は卒業している。コートジボワールの教育制度では義務教育はこの小学校までである。したがって子どもは小学校を出ると、試験に受かった者だけが公立中学へ進むこと

ができる。だが公立でない場合も私立中学校あるいは専門学校に進む者が多いのが現状で、そのため小学校を出るとほぼ全員が村を離れダブやアビジャンの学校の近くに住む。

最初に述べたように、村とダブの間は約10キロメートル、車で15分程度の距離である。この距離だと村の家からダブの学校まで毎日通うことは可能なはずである。事実、移入民の子どもの場合、村に隣接する工場がサービスする通学トラックに乗って、村と学校の間を往復している。このほか、ミニバスを利用して通学することもバスの便があまり便利でないにしても可能だと思われるし、自転車通学もできるはずである。しかし、村のアジュクルの子どもの中で村からダブの学校へ通っている者はほとんどいない。ほぼ全員が知人宅や個人経営の寄宿寮に下宿をしているのである⁹⁾。

中学生をダブに住ませ理由を問うと、親たちはミニバスだと毎日交通費がかかること、工場のトラックには利用させてもらうように交渉することが難しいこと、自転車は危険であることなどを理由として答える。その反面、下宿をさせると下宿代や食事代の負担のほか、村にいれば小学生でも日々必ずおこなう家の手伝いへの期待ができなくなるのである。現在の40歳代の人たちが中学生であったときも全員が家を離れていたということからも、中学生になれば下宿をするというのが規範のようにもなっているとも考えられる。

しかしながら、子どもが村を離れるのは中学生になってからだけではないことがいくつかの例からわかる。小学校高学年になると転校し村を離れる子どもが何人かいるのである。たとえば、先のBの息子は、小学校4年までは村の学校へ通っていたが、小学校5年のときに10キロほどはなれた村の知り合いの所に預けられその村の学校に通い、6年の時にはアビジャンの伯父にあたるBの兄の所に移った。別の例では、Bの妹の息子は小学校5年までは村の小学校に通い、6年時にアビジャンから北へ約100キロメートルの所にあるアフェリ町の従姉妹の家に預けられた。現在は、また村に戻り村からダブの中学校に通っている⁹⁾。

これら中学生と小学校高学年の子どもいくつかの事例から、中学生になると子どもは村を離れるのはもちろんであるが、10歳を過ぎた頃から親は子どもを積極的に手放し生家外での生活を経験させようとしていると考えられるのである。

次に、都市で生まれ育った子どもたちについて検討したい。2001年に成人儀礼をおこなった23名の男性（年齢はおよそ20歳から22歳）の調査から、村外生まれで村外の小学校に通った者8名である一方、村外生まれで村の小学校に6年間の一部でも通った者は5名におよぶ。村の学校に通う場合、就学開始年齢がしばしば遅れ、またしばしば落第もする。教育環境としてはたとえ過密であるとしてもアビジャンの方が良好だと思われるが、子どもをわざわざ村の小学校に通わしている親もいるのである。

村外の子どもの村との関係はこれだけではない。休暇の間はほとんど子どもは村に滞在する。上の調査で村外の小学校に通っていた者のうち、保護者の勤務の関係でコートジボワールの内陸部で育った者2名を除く全員が、毎年2ヶ月間の夏休みを村ですごした経験を持つのである。このため夏休み期間は村は子どもであふれかえり、学校が始まると急に静かになる。期間中は毎日のように子どもたちは年齢ごとに男の子の場合サッカーなどをして遊ぶ。こうして村と都市の同年代の子どもたちはお互いに知己となっていく。この結果、成人儀礼の時にはなお誰が村在住かそうでないかの意識はあるものの、同じ年齢組としての集団形成が可能になるのであろう。

以上、大人と子どもの例を検討した。大人の場合、週の単位での町と村の往復がある。これに対し、子どもの場合は一年の単位での行き来といってよいかもしれない。そして年齢で往復の頻度に差はあるものの、村の側からは町へと出る動きが、町の側からは村との関係を継続しようとする動

きがみられるのである。

6 失業者の帰村

この村の人びとはほとんどの男性が村以外での生活の経験を持つ。つまり村は一度村外で生活した人を再度受け入れているのである。調査でえられたデータからは、すでに1920年代生まれの世代から、多くがアビジャンその他のコートジボワールの都市で働いた経験を持つ。都市で働いて停年などの退職後にふたたび村に戻ってきているのである。1920年代生まれのアブルマン年齢組に属する5人の男性のうち4人までがかつて村外で働いていた経験を持つ。また戦後生まれの世代ではほぼ全員が村外で一度は生活した経験を持っている。現在50歳代前半のニベシ年齢組の男性のでは1人をのぞき、その下の40歳代のボジョル年齢組に属する男性は全員が、一度は都市で学校に通ったか働いたかのどちらかの経験を持つ。この二つの世代で現在村に在住している人びとは、ニベシで4人、ボジョルで7人である。この11人のうちひとりとは高校を辞めたあとに村へ戻ってきている。残りの10人はアビジャンほかで一度仕事に就いたあと、失業が原因で村に戻ってきた人びとである。以下、本節では失業での帰村の場合を検討したい。村への投資と密接に関連する停年などによる比較的高齢での帰村については、次節で検討する。

まず失業の原因について説明を加えておきたい。それは国の経済状況と密接に関連しているのである。かつてコートジボワールの経済が好況にわたった1970年代⁽¹⁰⁾、当時の若者はほとんどが町で職を得ることができた。それにあたるのが、ニベシ年齢組とボジョル年齢組に属する者なのである。この世代の者が最低でも小学校卒の資格を有していたことも、ほぼ全員が就職できた理由ではと考える。その結果まったく村を離れて働いたことのない者は1名だけと、村から若者がいなくなった〈過疎〉が70年代から80年代にかけて一時的に出現したのである。ところが、国の経済は1980年代初めから不況に陥り、それは現在まで引き続いている。そのため1980年代後半にブルーカラー層を中心に大量の解雇がおこなわれた。現在この世代で村に暮らす人びとは、いずれも解雇後数年間アビジャンにとどまった後、80年代末から90年代はじめにかけて村へふたたび戻ってきた人たちなのである。一見、伝統的な村に暮らす農民であるかのようにみえる人びとも、いちどはアビジャンほかでのサラリーマン生活の経験があるのである。それだけではなく、帰村者のひとはアビジャン生まれアビジャン育ちで、失業後はじめて村の生活をはじめているという例もある。

この帰村者たち合計で10人の帰村時の条件について、村に土地があるかどうかと、村にほかの家族がすでに暮らしているかの二点について検討しておきたい。まず帰村者たちは村に帰ると土地があったのかどうかについてである。

最初にこの村の土地制度について簡単に説明しておく。土地はそこに植える作物が短期性か長期性によって扱いが異なる。まずキャッサバ（マニオク）などの比較的短期で収穫が終わり、どちらかというとき自給用の作物を植える場合、たとえ土地を一切所有⁽¹¹⁾していなくても、村の地区や個人が所有する土地のなかの遊休地を借りて耕作することは簡単にできる。もちろん自己の土地に短期作物を植えるのは何ら問題ではない。一方、長期性の作物、つまり油ヤシやゴムなどの樹木作物の場合は土地の貸し借りは現在ではほぼおこなわれていない。自己の所有する土地にのみこれらの換金作物は栽培可能なのである。したがって、帰村者が仮に土地を持っていなくても自給のための主食作物の栽培は可能であるが換金作物は植えることができず、現金収入は農業からは望めないこととなる。調査データからは、10人の帰村者中本人または親が土地を有し5ヘクタール程度の油ヤ

シヤゴムのプランテーションを経営している者が3人、同じく2ヘクタール程度のプランテーションを持つ者が3人、まったく換金作物植えられる権利のある土地を持たない者が4人である。帰村と土地所有との関係、つまり村に帰った場合にも比較的裕福な生活ができるかどうかの生活の展望はあまり関係がないこととなる。注目しておきたいのは、少なくとも村では最低限の主食用自給作物は確保できるという点である。

一方、帰村する条件として、村に他の家族が存在するかどうかである。親子の同居や兄弟の同居は村の中にもいくつか例があるが、帰村者の場合は帰村時に父がすでに死亡しているかかなりの高齢で他には兄弟が村にいない場合が10例中8例で大部分を占めている。残りの2例は帰村後に兄弟同居をはじめた例が1例、親子同居をはじめた例が1例であるが、どちらの例でも個人の土地は持っていない。つまり、土地を所有しない場合には村にすでに家族が住んでいるかどうかは関係なく帰村しているが、土地を所有する場合には村の家族の存在、特に父親の存在が帰村をするかどうかの条件となっていると考えられるのである。

以上をまとめると、帰村は自給作物の栽培用の土地が容易に確保できるため村に土地を所有しない場合も可能である。むしろ土地を所有する家族の一員の方が、帰村した場合に親族間におこる土地問題、それに加え絶大な父親の権威というものを慎重に配慮し、帰村の時期を決定していると考えられるのである。

7 停年による帰村と投資

この節では、都市で働く人びとが老後の生活設計の一環として村にプランテーションや養魚場⁽¹²⁾を作ったり家を建築するすることで、富が都市から村へと流れることを示したい。その例として、先に取りあげなかった停年者の事例をいくつかみていく。村の高齢者の中には相当数の都市生活経験者が含まれることは、すでに指摘したとおりである⁽¹³⁾。

停年などによる比較的高齢の帰村者の場合、あらかじめ村に帰る準備が長年にわたってなされている。失業による帰村者が、村へ帰ることをほとんど準備していないまま帰ってきたのとは対照的である。どのように準備がなされているかを二つの例からみていきたい。最初に述べるのは2001年に帰村したCさんの例で、次にあと数年で帰村予定のDさん例も参考としてあげておく。

Cさん。もと軍警察官⁽¹⁴⁾。55歳を過ぎて退職して村へ戻ってきたところである。かれは15年以上前から村に大きな家を建て始めた。しかし資金が続かず、家は何とか住めるまでにはなったものの、内装などはほとんど手がつけられていないままの未完成状態である。この家に10年以上にわたって住んでいるのはCさんの兄夫婦。Cさん自身は仕事で国内のあちこちを転々としていたので、村にときどき帰ることすらなかなかできず、退職するまでこの家はほとんど利用していなかった。村に戻った現在は、兄夫婦とは別の入り口から入れる部屋をCさん夫婦で使用している。Cさんの村への投資は、家だけではない。退職の1年前ぐらい前から家の裏に養魚場を建設し始めた。兄弟で親から受け継いだ土地の方は兄が利用しているので、Cさんはこの養魚場からの収入で食べていくつもりだという。

Dさん。50歳過ぎで停年まであとわずか。弟がひとり同じくアビジャンに住んでいる。家は1980年代に両親がまだ生きていた頃に建て、父母ががそこを使っていた。父につづいて母も亡くなったあとは、親戚が家を管理している。もちろん村に来たときはDさんが家の長である。99年には息子の成人式を機会に家の増築もしている。また、油ヤシのプランテーションを所有しているほか、2年

前からCさんと同じく養魚場を家の裏に作った。Dさんはアビジャンに住んでいて毎日の管理はできないので、親戚にこれらも任せている。

このように二つの例とも、在職中に村に家を建て、村のプランテーションないし養魚場へ投資をおこなっている。村外者が村に家を建てるのは、現在の50歳代の人びとに始まったことではない。村に4軒ある「ヴィラ」と呼ばれる立派な作りの家のうち3軒は、現在70歳をこえる世代の人びとが都市で働いている間に建てたものである。投資はおそらく家への投資が優先し、さらに余裕があれば村の土地に油ヤシないしゴムのプランテーションを拓くなどするのである。Dさんの場合は都市にいる間にすでに〈不在地主〉的にプランテーションから収入を得るとともに、同時に退職後に備えているのである。村外者は退職後の生活設計として、都市で得た余剰を村に投資しているといえるだろう。しかしながら、村へ家を建てることは、単なる老後の生活の準備だけではないと考えられる。節を改めてこのことを論じたい。

8 村に家を建てる

モボエム村だけではなく周辺の村を訪れると目につくのは、農村には不釣り合いなほど豪華な家である。たとえば、上の4軒のヴィラの内装にはすべてタイルが貼ってあるなど、建設費用が普通以上にかかったことをうかがわせる点が多い。建物自体もまわりに広い庭があるなど家を建てる土地が不足しているとはとても思えない場合にも2階建を建てている例が多い。そのもっとも顕著な例が、ある村に建てられた4階建てエレベーター付の家ではと人びとも言う。

このような豪華な家を村に建てるのはどうしてなのだろうか。アビジャンの北のアキエ人の村について述べたものに、次のような指摘がある。それによれば、「都会で成功した人は、自分の出身の村に家を構えるのが成功のシンボルで、村の一員として、祭りや葬儀のときに中心となって一役買う。だから、アビジャンの人はしよちゅう村へ帰る。そうしないと村の人たちから後ろ指をさされてしまう」[大林 2002:192]、というのである。

家を建てるのが成功のシンボルであることは、アフリカに限ったことではないだろう。そのため人びとは無理をしても家を建てる。しかしどうして今住んでいるところではなく村にそのシンボルを建てるのだろうか。

たとえばモボエム村の40歳代中頃の男性Eさんの場合は、村に建てる理由がある。Eさんは1980年代の終わりに一度失業して、アビジャンから村へ戻っていた。その後仕事が見つかり、ふたたび5年ほど前からアビジャンの会社で運転手として働いている。このEさんの父親は2000年に長老就任の儀礼であるエベブ儀礼をおこなうこととなった。父の人生最後の晴舞台を前に、Eさんは（おそらく）少ない給料から工面し、父親の祭に間に合うように、3部屋からなる家を村に新築したのである。この場合、父のために建てているので父の住む村に建てるしかないだろう。

一方、上でみたCさんは軍警察官をしている間はずっと官舎住まいだった。転勤があったからだとはいうが、村以外には家を持っていない。村に家を建て始めたのは15年以上前のことであり、この間住んでいたのは兄である。Dさん自身は地方勤務だった期間も長くそれほど頻繁には村を訪問していないのである。またほかにもCさんの家以外にも建築は始まったものの未完成のままの家がもう1軒村にはある。建築主は立て始めてしばらくして亡くなってしまったが、一応は居住可能なので現在は親族が住んでいる。亡くなったのは80年代中頃で、まだ40歳ほどであった。つまり、町へ出て成功した人は、かなり若い年齢から自らは当分の間暮らす予定のない家を村に建て始めてい

るのである。しかも、建築を始めた時点では建物が完全に完成するほどの資金は用意できていないこともわかる。

若いうちから資金不足のまま村に当分住む予定のない家を建てる。将来の生活設計としても早すぎ、成功のシンボルとして建てるとしても中途半端に思えるような家を建築するのがどうしてかを示唆するのが、村人が語ってくれた村に家を建てることに関する次の寓話である。物語の話者は50歳前の失業による帰村者である。アジュクルの別の村であるオルバフ村の人から聞いたと話であるという。魔法が登場するこの寓話の要点は、以下の通りである。

村の若者が外国へ行ったまま長い間音信がない。そこで父親は息子のことを心配して、魔法を使って息子のいる外国のアパートまで飛んでいった。着いたときには、息子は勤めに出て不在で、白人の妻がアパートにいた。妻は息子に連絡し、息子はただちに家に戻ってきた。何年ぶりかで出会った父が息子に言ったのは次のことである。村に帰ってこい。でも村に帰る前にまず、家を建てなければならない。必要な金を渡してくれたら自分が建てておく。できあがったら知らせるので、そのあとで帰ってくるがいい。これだけ話すと父はアパートを出てドアを閉めた。息子はあわててドアを開けたがその時には父はもういなくなっていた。

この物語には二つの命令が含まれる。第一に、村を訪問せよとの命令、つまり、外国にいてすら村との交流を続けなければならないという強制。第二に、村を訪問する前にその条件として、村に家を建てよとの命令である。そして、命令をするのは魔法を使える父である。

ここで魔法について簡単に説明しておきたい。ダブ県は魔法の地としてコートジボワール一般にもよく知られている。そしてそこに住むアジュクルの人にとっては魔法と魔法使いは恐れるべき存在であると同時に、その力を使えば不可能に思えるものも可能になると考えられている。あるいは魔法と魔法使いはアジュクル人にとっては単なる物語などではなく〈ほんとうのこと〉なのだとってもよい。なにかの不幸が起きてそれが不可解なものであれば、呪いをかけた人物が探され、除呪の儀式までおこなわれる例も実際にいくつかあるのである。このような魔法のあり方を念頭におくと、たとえ魔法が語られるのは寓話の中であっても、魔法や魔法使いは恐るべき力を持った現実のものとして捉えられることがわかる。つまり、物語の中の命令は、息子に対し強い力を持つ父の命令であるだけでなく魔法使いからの命令として、息子には受け取られるのである。そしておそらく息子と同じ境遇の（聞き手となった）都市生活者にも同じ効果が生まれるであろうことは、十分考えられるだろう。

都市に出て多少なりとも蓄積ができた成功者が、まだ若い頃から村に家を建築するのは、家が成功のシンボルとしてあるからであろう。そのことを否定するのではない。しかし家を建てること、そのあとで村を訪問することには、そうしなかった場合に恐ろしい結果になるかもしれないという強制力も働いているのである。これが先に引用した文の中で大林のいう「村の人たちから後ろ指をさされてしまう」ことであり、さらに言いかえれば、人の嫉妬を怖れるゆえに、家を建て村を訪問するのである。

調査中にも実際に、アビジャンに住む人が村にそれなりの家を建てていないという非難を聞いたことがある。しかも、その非難を私に語ったのは、村の生まれではあるがアビジャンに住んでいた当時アビジャン大学の大学生であった。将来自分自身がそのように非難される可能性の一番大きい

若者からであったのである。

村を出ている人びとが村に家を建てるのは、老後の住まいを確保するためだけではない。また、自らの成功を村に誇示するためだけでもない。人びとは村を出て働く人びとに村に家を建てることを期待しそして強制しているのである。町で働く人の多くもまたそれを受け入れることで、あるいは建てなかった場合に起こるであろう災厄をおそれて、まだ若いうちから資金は十分ではないにもかかわらず、建設に着手してきたのであろう。

9 おわりに

アフリカの農村は閉鎖的で人々はそこで昔ながらの生活をおくっている、というようなイメージとは裏腹に、私の調査した村の人びとの多くは都市での生活経験を有し、現時点で都市で生活する人や都市二世・三世も数多くいる。人々が都市へと向かいはじめるとも半世紀は経過しているからである。しかし、こうした人びとから村民意識が消え去ってはいない。それは重要な人生儀礼がすべて村でおこなわれることで、村人としてのアイデンティティが維持・形成されることが一つの要因となっている。また制度的には、都市に住んでいても村出身者すべては認識上も実際の権利上も村民のままである。一方、実際の行動の面をみると、村に都市在住民を引きつける力とともに、村から人びとを都市へ排出する力が同時に働いていると考えられた。人びとは不断なく都市へと向かう一方で、村とのつながりは維持し続け、仕事がなくなるとまた村へ戻る。そして都市へ出た人びとがその間に獲得した富は、村の側にプランテーションや養魚場あるいは家の形で〈投資〉される。この投資は、一面では停年後の生活設計からなされるものであるが、見栄のためになされるものでもあり、また嫉妬を怖れてなされるものであると考えられた。

人びとが仕事が無くなれば村へ戻ることができるのは、また村の土地制度が最低生活を保障しているからであり、村の人口がまだ飽和していないからである。急激な数の増加がみられる次の世代では、はたして現在と同様の村と都市の関係が維持できるのだろうか。維持できなくなれば、村とのつながりが希薄化した都市の人びとはどのような変化をみせるのだろうか。今後とも注目をしていきたい。

注

- (1) 「移民」と「出稼ぎ民」を合わせて「移入民」としておく。
- (2) フランスに2人、イギリスに1人、アメリカに4人がいる。
- (3) もう一つの人生儀礼として一般に考えられる儀礼には婚姻儀礼があげられる。アジュールでは婚資の贈与にともなう儀礼、キリスト教の教会での結婚式とそのあとの宴会、役所への婚姻届時におこなわれるフランス市民婚方式の簡単な儀礼の3つがそれにあたると考えられる。しかしいづれの儀礼もおこなっていない夫婦も多く、結婚式そのものがあまり重要性を持っていない。
- (4) 2001年時点の年齢組はおよそ70歳の「ンベディエ」年齢組が最年長組で、以下「ンボルマン」、「ニベシ」、「ボジョル」、「セテ」、「ンジョルマン」と続き、「アプロマン」年齢組は目下形成中の最年少の組である。年齢組の数は計7組、組と組との間隔は8年である。
- (5) 結婚後の居住は夫方居住である。
- (6) マニオク（キャッサバ）を小粒状に粉碎し蒸した主食食品。コートジボワール独特の食品で、ダブ県ほかアビジャンの周辺で多く生産される〔茨木 1996〕。
- (7) コートジボワール民法では一夫一妻制と定められているが、2人以上の妻を持つ人も少なくない。

- (8) 村からダブの学校へ通っていたのは1993年には1名(病弱が理由), 2001年には2名(経済的理由)であった。
- (9) 親族間の子どもの移動については別に詳しく検討する必要がある。
- (10) コートジボアール経済は1970年代には「象牙の奇跡」といわれたほどの発展をした。
- (11) 正確には土地を耕作する権利および売買する権利の二つを含んだ権利である所有権ではなく, 耕作だけができる用益権がこの村の土地には設定されていて, 用益権としては貸借のみが可能である。この用益権を有するのは村人である個人および村の三つの地区である。土地が売買されたことはこれまでのところない。本論では煩雑さを避けるため「用益権を有する」ことを「所有」としておく。
- (12) 90年代末から例がみられる。
- (13) 定年退職後に村に戻ることはアジュクルだけの現象ではないことについては次のような指摘がある。「アビジャンの人口のなかの老人は非常に少なく, しかもその大部分は地元のエプリエ人である。」(Phillipe Antoine et Claude Herry, 1982, *Enquete démographique aux passages répétés : agglomération d'Abidjan*. Abidjan: Centre ORSTOM de Petit Bassam. p.104. [Touré 1984] からの孫引き。)
- (14) 'gendarme'. 直訳すれば「憲兵」であるが, 実際には軍以外の一般の秩序維持もおこなう。

参考文献

- Chalreard, Jean-Louis et Alain Dubresson, 1989, 'Un pied dedans, un pied dehors : à propos du rural et de l'urbain en Côte d'Ivoire'. Benoit Antheaume et al. (eds.) *Tropiques : lieux et liens : florilege offert à Paul Pelissier et Gilles Sautter*. Paris : ORSTOM. pp.277-290.
- Dozon, Jean-Pierre, 1981, 'Les métamorphoses urbaines d'un 《 double 》 villageois'. *Cahiers d'Études africaines*. 81-83, XXI(1-3), pp.389-403.
- 茨木 透, 1995, 「アジュクル族の富者儀礼——年齢階梯制社会における階層化の挫折」, 『民族学研究』60巻2号, 123～147頁。
- 茨木 透, 1996, 「コートジボアールにおけるマニオクとアチエケ——近郊農村における家内制食品加工業と女性の労働」, 『アジア経済』37巻6号, 59～78頁。
- 大林公子, 2002, 『アフリカの「小さな国」——コートジヴォワールで暮らした12ヵ月』, 集英社新書。
- 原口武彦, 1994, 「コートジボワールの葬儀と費用」, 小島麗逸(編), 『アジア墳墓考』, 剋草書房, 212～219頁。
- Touré, Abdou, 1984, *Le "vieux" et le "village" : situation et rôle des personnes âgées en Côte d'Ivoire*. Communication présentée au colloque de gérontologie sociale organisée par l'Université d'Aix-Marseille (France) 9-12 mai 1984.

